

赤い小人



赤い小人 / *Le Coq de Bruyère* (1978) / ミッシェル・トゥルニエ (桐原晃三・村上香住子訳) / 早川書房 (10/31刊・¥1,600)

ミッシェル・トゥルニエはフランスの作家。両親がドイツ語の教師だった関係で、ドイツに強い影響を受け、育ったという。それも、ナチスの支配とともに矛盾をきたすが。デビューは一九六七年、ヌーヴォー・ロマン以降の作家である。

かつて両性具有だったアダムが、二つに分けられ、やがてイヴとの子供たち、カインとアベルが生まれ……という、皮肉な創世記「アダム一家」。また再び、あの無人島に帰ろうとするロビンソン・クルーソー「ロビンソン・クルーソーの最期」。童話絵本としても刊行されている、少女の象徴的な物語「アマンディーヌあるいは二つの庭」。屈辱的な立場から、自分を追い求めていく小人「赤い小人」。そして、原題の標題作「大雷鳥」は、老いたドンファンである男爵と、夫人とのコミカルな物語だ——計十四編を収めた作品集である。

寓話風のものもある、ブラック・ユーモア風のものもある——しかし、そのどれでもない。ともかく、さまざまな立場から、さまざまなレベルで読むことのできる、好短編集だろう。(俊)